

謀殺下山事件

矢田喜美雄

講談社



謀殺下山事件

定価六八〇円

昭和48年7月4日

第1刷発行

著者 矢田喜美雄

発行者 野間省一

発行人 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話 東京(三)五五五-二二(大代表)
振替口座 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© KIMIO YADA 1973

PRINTED IN JAPAN

0095-167497-2258 (0) (学2)

はじめに

一九四九年（昭和二十四年）七月六日午前零時二十分ころ、東京郊外の常磐線が走る五反野というところで、中年男性が列車にひかれる事故があった。それから一時間半後には、この事故者は初代国鉄道公社総裁の下山定則氏（当時49歳）とわかった。同氏は五日朝、いつものようにお役所差し廻しの自動車で家を出たが、その日の午前中の役所の会議にも姿を見せず、行方不明がラジオで放送されると大さわぎになっていた。下山総裁は戦後始めての国鉄従業員十万という、大量首切りを発表した直後のことだったからである。

下山総裁の死については、事件が起こった時点では「自殺」「他殺」のいずれとも不明だったが、法医解剖がすんだ後では、総裁は殺害された疑いが非常に強くなった。ところで数日後、事故のあった五反野で、死んだ総裁らしい人が列車に轢かれたあたりを長時間にわたって歩いて見たのを見た、という目撃者がたくさん現われたのである。法医解剖から見ると、先に殺された死体をだれかが現場へ運んで轢かせたものと考えられるのに、総裁らしい人物が事件の日の夕方、その辺を歩いていたというのでは、どうやら総裁は自殺したのではないか、そう刑事たちは考えた。

総裁の死をいっただいどう判断すべきなのか。この総裁の死のナゾをめぐって、新聞、報道、学者、捜査官たちの間には自殺、他殺の両派に分かれる対立論争が始まり、それは止めどもなく輪をひろげていった。一人の人間の死をめぐって、このような大きな見解の対立があった事件というのは前例のないことであった。

太平洋戦争に敗れ、占領軍が駐留するという日本歴史のうえでもいまだ体験のない混乱した社会で起こった事件であったが、主人公である下山氏の死については、彼の死は無駄ではなかったとする人もいた。事件のころの東芝会長・石坂泰三氏は、当時を回想して朝日新聞紙上に「僕の東芝再建には下山氏の死に負うところが大きい。同氏の死はイヌ死ではないと思った」と述べていた。石坂氏に限らず、そう思った思いをした経済人は多かつたようで、下山氏の死については、左傾化していた当時の労働運動の火の手を消し、今日の日本の国際的経済成長の礎石になった、いわば「功労者」扱いをされているのである。

ところで、事件が国民に与えたショックは実に大きかった。ショックはさらに後をついだ。占領下の日本の進路は下山事件、松川事件と国鉄レール上で起こった怪事件を契機に大きく変化をはじめ、占領が終わっても引き続き保守政権に政治の手はゆだねられて今日に至っている。

私は事件当時、朝日新聞社会部記者として事件を取材したのだが、偶然なめぐりあわせで東京大学法医学、同裁判化学両教室、東京地方検察庁などの委嘱をうけて事件の鑑定作業に協力する羽目になった。新聞記者としてこのような立場におかれるということは空前のことと思われるのだが、同時に私は記者である職業上の自由をも失ったのである。しかし、殺人事件の「時効」である十五年という歳月もはるかに過ぎ、私を拘束するものは何もないまま、昭和史のたいせつな部分で暗やみになっているこの事件の真実について、私の知っていることを述べる義務があるように思いペンをとったのである。

一九七三年五月

著者

目次

はじめに

第一章 総裁怪死

轢断体発見と司法解剖……………10

総裁怪死までの百時間……………26

第二章 事件の背景

事件のころの世相……………54

十万人の首切りと国鉄労組内部……………57

第三章 自殺・他殺をめぐる論争

自殺と決めた捜査一課……………68

事件に首を突っ込んだ私……………70

見解の対立は続く……………87

第四章 長い血の道

轢断点上手に血痕発見……………96

ルミナール検証とAMQ型血液……………117

レール上の血痕群とロープ工場の血……………136

死体は二回ひかれた……………144

第五章 ヌカ油と色素のナゾ

衣類付着物の検査……………151

衣類付着の油はヌカ油……………155

下山色素はすべて塩基性染料……………160

衣類と靴のメモ……………168

第六章 他殺捜査は手足をもがれて

しぼられた捜査の的……………	176
解散された特別捜査本部……………	178
多くの疑問を残したまままで……………	181

第七章 警視庁の「事件捜査報告書」

報告書がもれた裏話……………	185
報告書はフィクションでいっぱい……………	187
五反野の怪人物像……………	202

第八章 事件をめぐる秘話

法医論争の裏で……………	206
殺人予告……………	213
情報屋の影……………	221

第九章 謀殺情報

誘拐者に囲まれた総裁……………	232
アリマ、オノデラは実在の人……………	244
解けないままのナゾ……………	250
赤色テロ……………	259
謀殺は日米反動勢力の手で……………	261
下山総裁謀殺論……………	262
誘拐を手伝った元関東軍将校K氏……………	266
誘拐本部は三越店内か……………	268
五反野の替え玉は消された……………	271
総裁殺害はCIA……………	272
誘拐四人組とナッシュ四七型……………	275
私は現場近くで深夜の誘拐車を見た……………	281
私は死体をガード下へ運んだ……………	285

第十章 事件の真実にいどむ

情報をつなぐ糸……………292

だれの手で？……………305

事件補遺 319

装丁／岩本正雄

謀殺下山事件

第一章 総裁怪死

轢断体発見と司法解剖

田端操車場の夜

昭和二十四年七月五日、東京は昼はくもりで無風、午後は二十八度近い気温でむし暑かった。東京の北部に当たる田端操車場は、東京鉄道局管内でもとくに大きな操車場で、その広さは当時の羽田空港の面積に匹敵するほどの広大なものだった。この操車場の東端は山手線の日暮里駅に始まり、西端までの長さは三キロメートル。途中には貨物専用の尾久駅を抱えていて、東北、常磐両幹線向け貨車の操車を一手に引きうけ、その複雑なレールの配置はさながら電子計算機の内部配線にも似ていた。

操車場はレールの複雑さのうえに機構がまた輪をかけて複雑だった。操車場には大ボスの存在の操車場駅長がいて、その下には首席以下四助役がいた。たくさんの機関車の出入りがあり、機関区長が指令を出す。それに機械や軌道を管理する機械軌道区長がいた。さらに操車場内の工事・補修をする工事区長。入り乱れるレールをまちがいなく列車出入させるため設置された信号灯を管理する信号区長。その通信連絡をする通信区長。さらに電気系統の事務をつかさどる電務区長といった職種があつ

た。そしてこの巨大な機構をもつ操車場には、いろいろな土地から機関士や車掌が集まっては散ってゆくのである。その人たちは水戸からも高崎からもやってきた。

ところで、七月五日の田端操車場は一種異様な雰囲気包まれていた。操車場の東端に近い機関区では、この日、国鉄はじまって以来という大量首切り発表で、整理の対象となった六十名以上の人に申し渡しがあったからだ。左派の強い田端機関区では、通告すると同時に、役職者の主なところは数名の例外を除いて自分らは解雇者からどんな仕打ちをうけるかわからないという心配が先に立って行方不明者が多く、責任者もない職場がたくさんあったという。ある人は日ごろ行ったこともない映画館に雲がくれするかと思うと、親戚に顔出しをしたり、とにかく自宅には寄りつかなかった。また、整理通告からもれた左派の労組員に対しては、機関区長は数日間の臨時休暇を与えたり、この日の仕事を变えさせたりして、顔も知らない人たちといっしょに働かせるような工夫もした。首切りさわりぎにからんでとった非常措置のため、七月四、五両日にかけては、機関区内で仕事内容がすっかり変わって面くらって何も手がつかない状態が起こった。

田端機関区のこうした整理問題にからんだ混乱とは別に、労組左派の人たちは休暇も返上して集まっていた。というのは、首切り発表にともなうて予想されている国鉄労組中央闘争委員会のスト突入指令が、いつくるかわからないからだ。夕方から夜にはいってもインターナショナルの歌声はそこで絶えなかったが、暗やみが広い操車場を包んでいった。

中央闘争委のスト指令はいぜん発せられなかった。左派労組の機関区員たちは十万人の首切りだというのに、どうして組合本部は戦わないのか、指令のないもどかしさに腕を組んでいたが、やがて地面に腰をおろし車坐にならんだ。そして氣勢をあげていた人たちの歌声も夜のやみに消えた。

田端発・八六九列車

暗いやみに包まれた田端操車場の東端には、大きな屋根をまっくろにさせた機関車があった。その機関庫に隣あわせてバラック建ての長屋が並んでいた。列車運行者たちの休憩所で、浴室や荷物置場、仮眠用の長ベッドもあった。その夜の二十一時すこし前、水戸機関区と同車掌区から三人の乗務員がこの休憩所に顔を出した。

三人はその日の昼、水戸を出た旅客列車を運転して上野につき、帰りに割当てられた貨物の平行八六九列車を運行するためにやってきたのだった。山本健機関士(当時45歳)、荻谷定一機関助手(23歳)、横田一彦車掌(35歳)の三人は、休憩所にはいるなり部屋にいた庫内雑務手に列車の出る一時間前、二十三時には起こすように頼んで仮眠にはいった。この三人がはいった宿直室には、この夜半から早朝にかけて田端を出る八本の長距離貨物列車の乗務員と、保安要員のほか、首切りのゴタゴタで家に帰れなかった労組員や、どこの職場からきたのかわからない数名の男も泊まっていた。

さて、八六九列車機関助手の荻谷さんが目をさましたのは小便に行くためだったが、時計をみるとすでに二十三時半だった。頼んだ起こし時間を三十分も過ぎていたのであわてた。列車を引く「D51651」機関車は、荻谷さんの手で出発一時間前から整備をはじめないことには定時に出発はできないからだ。怒った荻谷さんは雑務手のいる部屋に駆け込んで怒鳴った。二人いた雑務手はヘボ将棋に熱中して起こし時間を忘れたのだが、この二人も整理問題の余波をくった臨時の配転者だった。荻谷さんは山本機関士をすぐ起こすよう頼んで休憩所をとり出し、暗い操車場のレールの間を走って目ざす八六九列車の機関車に飛び上った。

操車場のいちばん北側一号線におかれた「D51651」機関車はおかしいことに火種ひだぬが消えそ

になっていた。蒸気庄の針をみると規定の十キロの三分の一ほどしかない。これはたいへんなことだと、カマの石炭炊きに全力をあげた。しばらくして山本機関士もきて手つだってくれた。こうして四十分後にはようやく十五キロの蒸気庄となり出発することができたのだという。田端操車場の正式列車出発記録によると、山本機関士らの運転した八六九貨物列車が田端を出た時間は「六日零時十分」とあり、予定の「六日零時二分」からは八分遅れの出発となっていた。この八六九貨車の田端出発の遅れは偶然のことかどうかは別として、その後、田端駅構内で起こった奇怪な事件とからみあいがあるのではないかとみられ、大きな疑惑をまきおこすことになった。

八六九列車は、遅れをとりもどすために全力をあげて突走った。三河島、南千住、北千住と、カーブと登り坂を信号をも見ずに走り続けた。この八六九列車は連結していた貨車がふつうの半分以下の四十九両だったことと、それも全車両が空車で荷物はまったくなかったことでスピードが意外にあがった。山本、荻谷の両機関士はホッと胸をなでおろしたのだが、八六九列車には、出発時間の遅れということのほかにもうひとつの異状があった。それは機関車のヘッドランプが、発電機がまわらないためつかなくなったのである。二人はやむなく予備の蓄電池を使ったのだが、八六九列車の機関車のヘッドランプはわずかに十ワットぐらいしかなかった。

出発の遅れをとりもどすため懸命のカマ炊きに熱中しているうち、八六九列車は大きな響きをたてて荒川鉄橋を渡った。鉄橋を渡り切ると常磐線レールはここで大きく右にカーブを切る。荻谷助手は鉄橋から四百メートル先、東武電車と交差するガード下にきたとき、綾瀬駅のシグナルをみるため機関車から体をのり出した。その瞬間だった。ガード下を抜けたところで、レールに敷いてある、ガラスがバチバチと機関車の底板に当たる音をきいたのである。そして綾瀬をすぎ金町駅にかかるころに

は、田端出発の八分の遅れは完全にとりもどしていた。八六九列車は快調なペースに乗って進んだのだが、荻谷助手は江戸川鉄橋を渡って松戸駅につく手前で、機関車D51651の前部右側レールとの間に火花が散るのを発見した。

轢断死体は下山総裁だった

七月六日午前一時、列車が我孫子駅に着くと山本機関士は車からおりてカンテラの光で調べると、火花は機関車最前部の排障器が曲ったためとわかった。荻谷助手は五反野ガード下でパラスのはじけ散る音を思いだして何か事故を起こした、と直感したという。八六九列車は水戸駅に六日三時四十九分についた。山本、荻谷の二人は水戸機関区の人だから、ふだんならここで次の機関区の人に列車を渡すことになるのだが、水戸で調べると排障器の曲りばかりではなく、機関車の底や貨車の車軸に多量の血痕がみつかった。こうして八六九列車は人身事故を起こしたことがはっきりし、列車は機関車もろとも運行中止で車庫入りとなった。

一方、八六九列車が五反野を通った後、六分後には上野発松戸行の二四〇一M最終電車が五反野ガード下を通過した。この電車の前灯は一キロワットの明るさだったので、運転手の椎名利雄さんはガード下を通過した直後、下り線レール上に点々と赤い散乱物があることを認めた。電車が綾瀬駅に停車した六日零時二十六分、ホームに出ていた安部献次郎助役に人身事故と思われることを報告、その確認を頼んで発車した。安部助役はすぐ松本正四郎改札係、岸勝弥駅手を呼んでカンテラを持たせ現場に行かせた。現場へ行った二人は、小菅刑務所裏の警手詰所から安部助役に電話で、首と手足のない胴体がレール横にころがっていたが、膚が白かったので女の死体らしいという報告をよせた。この松